

2009年の幕開け

地域から日本を変えるー！



新しい年を迎えました。
皆様いかがお過ごしでしょう
うか。本年は私にとりま
し、殊の外大切な年となりそ
うです。
どうぞよろしくお願い申
しあげます。

大人になって自分を支える
のは子供時代の自分自身

「集落の誇り」

二〇〇八年の十二月上旬、北小
谷の大網地区を訪問の折、たまた
ま大網地区の外れにある廃校とな
った北小谷小中学校大網分校校舎
を通りかかった。そこは、アウト
ワード・バウンド・ジャパンとい
う野外体験団体の基地として再利
用されていた。

この団体は世界中にネットワー
クを持つ非営利の冒険教育機関の
一つである。この団体の活動は、
都会の青少年の自立心を養うのに
役立っているのみならず、後述の

とおり「限界集落」と呼ばれる大
網地域の地域振興の糸口にもなっ
ていた。

大網訪問後、小谷村多目的ホー
ルにて「里山のきずな、守るに
は？」と題したシンポジウムに参
加できた。「限界集落」の再生に
向けた取り組みとして、大網地区
を取り上げた内容であった。大網
地域にそれぞれの立場でかわつて
こられた原さん、横川さん、梶
谷さんの実感のこもった話を伺う
ことができた。

原さんは「大網地区の四季のお
祭りが集落の誇り」であり、これ
が続く限り集落は続く、と地域ア
イデンティティー継続に向けた取
り組みの意義を強調された。

横川さんは、大網を離れた人た
ちも、いずれは大網に戻りたいの
と願望があり、また多くが戻らな
ければならないとの宿命も感じて
いる、との認識を述べられた。

そうした人達の気持ちを繋ぐた
め、大網の祭りや行事などに参加
を呼びかける情報網、ネットワー
クを形成していくところに、大網
再生の希望はある、との思いを表
明されていた。

更に横川さんは、元々大網には
「一人は皆のため、皆は一人のた
めにずくを出す」という気質があ
り、仮に大網が消滅するとしたら、
それは人口が少なくなる時ではな
く、大網気質が消えたときである、
と喝破された。

自由民主党長野県第二選挙区支部

むたい俊介ニュース

平成21年 新年号

発行元
長野県松本市白板 2-3-30
大永第三ビル

Tel : 0263-33-0518

Fax : 0263-33-0519

www.mutai-shunsuke.jp/





小谷村北小谷朝中学校大網分校跡

「風土の持つ教育力」

梶谷さんは、上述の野外活動体験団体が縁で東京からこの地域に移り住み、三人の子育てを経験し、風土の持つ教育力を認識した体験談を紹介された。集落皆がお互いに家族同様の付き合いをし、お互いの安否を確かめ合う。子育てをする身にとって、「共に育て」、「見守られている」という安心感があつたという。

子供たちはまた、日々の季節の移り変わりに敏感になり、自然を楽しみ尽くす生き方を身に付けた。それこそが「風土の持つ教育力」であることを実感されたという。そしてこの思いは子供たちにとって忘れ難い原風景になるだろうというお話であつた。

梶谷さんは二〇〇八年四月に百一歳で亡くなられた児童文学作家の石井桃子さんの「子供たちよ今をしつかり楽しみなさい。大人になつて、老人になつて、あなたたちを支えるのは子供時代のあなたたちなのですから」という言葉の意味を噛みしめているとの話もされた。

限界集落の典型例とも解説される大網地区ではあるが、このシンボジウムで、この地域の再生の火種は決して尽きていないことをひしひしと感じた。キーワードは、「誇り」、「文化継承」、「子供」、「交流」、「主体的意識」である。

「英国の景観保全のセンス」

さて、大網訪問の数日後、安曇野市内で松本市出身の熊井明子氏による「安曇野の田園生活を豊かに」英国の暮らしに学ぶ」を伺う機会があつた。安曇野市出身の故熊井啓映画監督の奥様である彼女は、英国を頻繁に訪れ、英国人の暮らしぶりに詳しい。その体験から、安曇野の、さらには我が国の地域社会の今後を考えるヒントを頂いた。

英国は農山村が美しく、豊かに輝いている国である。熊井氏はそんな農山村を継承し続けている英国人気質として①マイペースであり人のことは気にしない、②一般の人がボランティアに熱心である、③安上がりに「今」を楽しむ術に長けている、という点を引き合いに出し、経済面ばかりを重視しがちな日本人の生活スタイルの見直しを提案されておられた。



イングランド・パイブリーの集落

「地域再生の火種」

故熊井啓氏は故郷の安曇野のことを口癖のように、「俺が死んだら魂の帰るところ」と語っておられたそう。幼少時に親しんだ安曇野の自然をこよなく愛し、人一倍郷土への思いが強かったようである。

熊井啓氏に限らず、小谷村大網を離村した後継者達も「故郷忘れ難く候」の気持ち強い。子供の頃に故郷の風景、生活を存分に楽しむことは、その後の人生の糧にな

る。先に紹介した石井桃子さんの言葉どおりである。地域再生の火種は、子供の時代の「故郷での生活、教育にある」ということになってきそうである。広く自分の出身地域を廻っていて地域再生の最大公約数的キーワードに辿り着きつつある思いがする。感受性の強い子供時代の農山村体験、故郷体験の制度化は、子どもにとって、地域にとって、大変意義深い。



安曇野の民家の屋敷林

小学唱歌「ふるさと」にある、「志を果たして いつの日にか帰らん。山は青きふるさと 水は清きふるさと」という気持ちは、

日本人共通の精神の基底に存在するものなのかもしれない。そしてそれこそが地域再生の原動力となりうる。

福祉分野に人材を確保するために

「慢性待機状態の介護施設」

地域の実態を知るために、福祉施設を訪問させていただく機会も多い。施設関係者から、地域福祉の抱える様々な矛盾を伺う。

特別養護老人ホームを幾つか訪問すると、慢性的な入所者待機状態についての話を伺う。例えば六十人程の定員に千人以上の待機者がいる施設も稀ではない。止むを得ず負担が多い有料老人ホームを選ぶ現実もあるとのこと。介護保険制度に加入し保険料を払っているが、いざ介護となったら施設

へ入居できないのでは、保険が約束した適正な給付がなされていないということにもなりかねない。

また介護施設を「地域密着型」にするため、建築にあたりなるべくベッド数を抑えた小規模な施設を求められる。しかし理念とは裏腹に、コンパクトになれば規模の経済が働かず、経営にはマイナスとなる。結果、新たな施設整備が進まない。

知的障害者施設を訪問すると、関係者から知的障害者に対する世間の理解度が低いという共通した声を聞く。視察した実感としても、老人施設や身体障害者施設に比べ、老朽化が進み、ギリギリのスペース、スタッフでやっている印象を受けた。

知的障害への、地域住民の理解という点も大きなネックである。象徴的な事例として、施設にいた兄弟が、自身の資産である不動産

を利用し、仲間とともに暮らすケアホームの設立計画が地域の大反対でとん挫した事例があるのだそう。ノーマライゼーションの理念のもと地域に溶け込んでいくことも、地域の心理的な壁が立ち はだかる。

「やりがいとその報酬」

社会福祉関係分野の大きな課題は人材確保である。特に近年の介護報酬の引き下げにより、若者が介護職を目指すようにも、生活設計を考え二の足を踏むような状況がある。私も若手介護職の会合に参加した際に、彼らが、「誇りと心意気」だけで何とか仕事を続けているという言葉を耳にした。彼らの収入は入所者の年金収入に及ばないのだという。

入所者の安心を支える介護関係者に、職責にふさわしい待遇を付与していくべきである。仕事のやりがいは報酬だけで測られるもの

ではないにせよ、社会全体がその職に敬意を表せるものを付与しなければ地域で福祉を支える人材は集まらない。そのためには、**財源の議論に勇気を持って乗り出すことも必要**である。

「施設入所者と非入所者」

一方で、年金、医療、介護等の重複給付という観点も無視できない。施設に入居できた高齢者の方は、比較的低廉な自己負担によりその後の人生を施設で全うされることがほとんどである。その間、年金は貯まり続ける。一方施設入居ができないでいる方は、年金で生活していかななくてはならない。両者の格差が激しい。実際、入居者がお亡くなりになった際に、手付かずに残った多額の年金貯金をほとんど見舞いにも来なかった家族が持ち帰ったという話も聞く。

ある知的障害者施設では、個人貯蓄が積み上がっている入所者が

いらつしやるという話を伺った。障害年金と入所の自己負担の差額の積み重ねである。一方で施設関係者は非常に低い処遇で職場定着率が悪くなっている。

私は、この実態を伺い、年金と障害者自立支援法の個人負担を差し引いた中で残ったお金を、将来に向けて貯蓄するだけではなく、現在の生活の質をより良くするという視点から、例えば**施設運営側が独自に利用者やその家族と協定を結び、スタッフの処遇改善、設備の清潔化、充実にその資金を充てるのも一考ではないか**、と思えてきた。現在の公的財政の制約の中でも、地域や施設ごとの創意工夫を十分に生かせるアイデアである。

「古民家の福祉への再利用」

最後に、老人施設の供給不足、特に施設建設の初期投資にかかる負担軽減への対応策として、古民

家の再利用を推奨したい。既存の歴史的価値のある古民家建造物を、**老人施設や、障害者が世話人とともに生活をするケアホームとして再生利用**することが各地で少しずつ進みつつある。

福祉の財政制度を活用し、地域の伝統建造物を保存継承しつつ、現代の切実な福祉需要に生かすプロジェクトで、新たな内需創設の起爆剤にもなる。今こそ足もとに眠る伝統に陽を当てるべき時である。



安曇野の古民家を活用したグループホーム

むたい俊介プロフィール

生年月日 昭和 31 年 7 月 3 日

本籍 長野県安曇野市(旧三郷村)

趣味 街歩き、スキー、テニス、囲碁

座右の銘 一期一会

経歴 松本深志高校卒業

東京大学法学部卒業

昭和 55 年 旧自治省入省

茨城県総務部長

地方分権推進委員会参事官

総務省消防庁防災課長

総務省調整課長

大臣官房参事官等を歴任

平成 19 年

自治体国際化協会ロンドン事務所長

平成 20 年 8 月 総務省退職

自民党長野県第 2 選挙区支部長